

Development of depression assessment tools using humanoid robots -Can tele-operated robots talk with depressive persons like humans?

松島, 敏夫

<https://hdl.handle.net/2324/7329427>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



氏名： 松島 敏夫

論文名： Development of depression assessment tools using humanoid robots -Can tele-operated robots talk with depressive persons like humans?

(ヒューマノイドロボットを用いたうつ病評価ツールの開発 -遠隔操作ロボットはうつ病患者と人間のように対話できるか?)

区分： 甲

論文内容の要旨

背景：うつ病はよくみられる精神疾患であり、大きな社会的損失を引き起こす。うつ病への早期介入が重要であるが、うつ病患者は恥意識やスティグマ（偏見）のため自らの症状を周囲に隠す傾向があり、特に初期の段階では精神科を受診することをためらうことがある。我々は人型ロボットによるコミュニケーションが新しい解決策になると考え、うつ病患者は人間よりもロボットの方がより話しやすいかもしれないと仮定した。

方法：大うつ病性障害患者13名と健常対照者27名を比較した。遠隔操作ヒューマノイドロボットと心理士それぞれによる面接で、ハミルトンうつ病評価尺度（Hamilton Depression Rating Scale: HDRS）を用いた抑うつ重症度評価を行った。さらに、参加者は対ロボット面接の印象について尋ねる自記式質問票に回答した。

結果：信頼区間解析およびt検定により、対ロボット面接と対人面接の間でHDRSの評価は同等の信頼性があることが明らかになった。また、“面接に対する緊張感”や“抑うつ気分や自殺念慮について話すことへのためらい”については、両者の間に有意差は認められなかった。対人面接と比較して、対ロボット面接では、特にうつ病患者において恥意識に関連する得点が有意に低かった。

限界：サンプルサイズが小さく、評価者は男性のみである。

結論：本研究は、うつ病の評価における遠隔操作ヒューマノイドロボット面接の信頼性を示した最初の研究である。対ロボット面接は、対人面接と同等の信頼性を持つ可能性が示された。対ロボット面接は、臨床現場におけるうつ病患者の恥意識に関連する抑圧された感情や内面を評価する上でより効果的で、うつ病に関連するスティグマを軽減する可能性が示唆された。